

kirameki shower vol.18

詩を愛し、詩に生きる



kiramekikids

夢を見続けている限り

心の叫び

裏腹に

夢に届かぬ

声

枯れても

枯れても

出し続ける

喉の痛みは

夢の実感

心の叫びは

魂へ刻印される

信じ続ける

思いだけが

明日へと

繋いでいく

私は

夢の

なかにいるのだ

夢を

見続けている限り

信じることだけで

真理に

無縁の人々

大勢が

列を作り

あちらこちらに

漂っている

主の言葉は

耳から入っている

はずなのに

心が拒否している

主の愛は

確かに

あなたに

届いている

はずなのに

拒否しているのは

あなたの

こころ

信じる

ことだけで

広がる世界は

無限なのに

与えられる

命は

永遠なのに

巨大な慈悲

太陽のように

日常的に

絶え間なく

すべてを照らす

愛の持続

百億年も

変わらず

休まない

主の愛

人間の愛には

濃淡があり

持続しない

好き嫌いは

愛には遠い

私たちの日常

生きるためだけに

費やされていく時間を

祈りにおいて

少しだけ

主に向けられる

感謝は

与えられる

万分の一もない

主の愛の大きさは

測り知れない

巨大な慈悲

この環境は

なんと

私たちに

適した

ものであることよ

愛は実現する

愛は

実現する

描け

心の中に

書け

具体的に

実行せよ

現実的に

数年待て

必ずそうなる

信じるんだ

今までも

過去も

未来も

そう

信じたことだけが

実現してきたのだから

生存欲求

生きる意欲と

引き換えに

犠牲を払い

勝ち残る

生きる意欲は

肉体の

維持に

心は

離れてく

神にはなれない

私たちに

人間を

思い知らせる

生存欲求

色々な

出会い

別れ

人生の彩り

色が抜ける頃

思い出は

もはや

現実ではなく

夢の続き

本当に生きて

いたのだろうか

うつつと夢の間で

信仰心と

作品だけを

遺そう

振り返る

魂の軌跡が

自分なのだから

最大なるもの

嵐の中

心細い

人間は

神にすぎる

弱さは

神不在の心

その

無明のなか

弱くなる

自分がいる

信じれば

一つに

信じなければ

別々の

か弱い

ただの自我だけの

自分

人間は

信じることによって

最大なるものと

共にいる

創作

創作は

君

自身への挑戦

心の理想は

描けるけれども

現実との違いは

明らかに

現れる

それに近づける

日々

長い長い訓練

途中で

引き返す人も

また

多い

日常のなかの

非日常

苦しみの

真珠

苦痛の石のなかの

ダイヤ

美しい

言葉は

羽ばたいていく

今は

飛べなくとも

使命に殉ずる

承認されない

君は

創作を

やめるだろうか

評価されない

君は

創作を

やめるだろうか

称賛されない

君は

世の中を

恨むのだろうか

心に

残る

創作の種を

宿す

ただ

使命に

殉ぜよ

正当な評価

目標を

見失いながら

毎日

日々は過ぎていく

努力の成果は

目に見えるだけでは

ない

積み上げてきた

努力の実績は

実績として

評価ではなく

現実として

積まれてゆく

自分の願望よりも

確かな現実の高さは

失意も得意も

関係なく

そこに

現前として

存在している

後の世に

残る

ものだけが

正当な

評価を含むものだから

心の命ずるまま

創作すればよい

自由に

そして

高く

やがて

深く

遠くへ

刻み続けた日々

平凡な

日常は

時間が

止まって

いるかのように

動いている

気がしない

この

ゆっくりとした

毎日に

自分の使命を

忘れてしまいそうに

時は

無常に過ぎてゆく

雲は流れ

雨は止み

青空が見えても

心は晴れない

生きてゆく

上で

乗り越えなければ

いけない

今に

つまずいて

いるようだ

習慣のごとく

自分の

成すべきことを

こなすのだ

その

刻み続けた

日々こそ

あなたの

生きた

ときだから

救いる者は

正義は

姿を隠し

悪は堂々と

胸を張って

開き直る

善を語る

弱き者は

数の多さを

盾とする

善を偽装する者に

眩まされている

逆転した世界を

救いる者は

闇の正体を突き止め

元に戻そうと

光りを照射する

どす黒く

汚れきった者たちは

その姿を

見破られたら最後

悪を

犯せなくなる

なぜなら

善を装ってこそ

善意に隠れて

地獄に引きずりこんで

こそ

達成できる

成果だったから

智慧の光りは

奥の奥まで

明らかにする

仏陀に

立ち向かえる者など

誰もいない

この世にも

あの世にも

そこにいる子ら

誰にも

評価されなくて

落ち込む時

自然に

目をやれば

木の枝の

さわさわする

声や

花たちが

何故か

励ましてくれる

何故だろうか

動けず

ずっと

そこに頑張って

いる子らは

淡々と

嬉しそうに

生きている

梁を支える

説明しても

分かり合えない

こともある

言葉では

言い尽くせない

深い溝

でも

少し離れてみれば

全体が見えてくる

人間同志

ぶつかり合う気持ち

わかり合いたい

いら立ち

その溝を

埋めるのではなく

架けられる橋が

支え合う心

信頼は

決して崩れない

梁を支える

気持ちさえ

あれば

主が御わす

時代が

動き始めた

真実が現れ

マインドコントロールが

戦後の呪いが

解けてゆく

一気に目覚めよ

日本国民

主が御わすのだから

救国一致

日本の滅亡は

天災ではなく

人災によって

図られる

子どものためにと

言いながら

祖国を売る女

電気は

いらないと言って

祖国を

踏みにじる男

内なる者の

手引きによって

この国は

滅びようとしている

戦後の洗脳が

意図的な破壊を

導いている

救国一致は

最後の希望

この国のために

できることを

しよう

神国日本のために

祝福

成功者を

祝福する心は

自分をも

成功に

導く

成功を

祝う者は

その成功を

肯定すること

同じ

自分も

成功したければ

成功を

夢見ること

他人も

自分と

同じように

成功することを

望むこと

祝福は

祝福を

生むのだから

ささやかな幸福

幸福は

条件が

高くなり

贅沢な

気持ちに

きりが無い

求めても

求めても

何か足りないのは

渴いて

いるだけだから

飲んでも飲んでも

足りないのは

真水ではないから

ささやかな幸福は

自分が

よく知っている

主を信じれば

主を

信じれば

すむことを

主さえ信じれば

終わる不幸を

なぜ

好む

破滅の道を

なぜ

降りたがる

不幸の階段を

その自我こそ

邪魔なのに

主さえ

信じれば

すむことなのに

神国日本

人材の配置は

完璧にされ

力を発揮すれば

国難は去る

日本は

本来の姿を

取り戻し

神国となる

日の丸は

高く掲げられ

世界の国々は

敬意を

表する

太陽に

感謝するように

人間として

正しい者は

わかっている

選べないのは

その人の罪

選ぶべきものは

わかっている

正しいと

勇気ある判断を

行なうのは

その人の意志

今

人間として

問われている

ものがある

背くその背に

見えないものを

信じられず

すべてを

疑い

自分を

否定している

他人の言葉は

意図的に

選択され

信じない方向に

すべてを

解釈している

心に

神は遠くで

手を差し伸べている

けれども

あなたは

あなた自身に

背くから

神を

感じるものが

出来ないでいる

本当は

背く

その背に

手を

かざしているのに

最後の出発

胸の痛みに

襲われて

死を思い

生を感ずる

時に

無駄な日々

時に

無駄な時間

落ちて行く

砂を

見つめ

自らを省みる

まだ

生が

あるうちに

生命が

生かされている

うちに

光が

あるうちに

自分を

洗い直す

最後の出発と

心に決めて

小さかったのではなく

小さな光り

輝き続けて

その大きさが

わかりかけてきた

小さな光り

眩しすぎて

その大きさが

わからずにいた

星は

遠くにあり

ここからは

小さく

見える

しかし

小さく見える

その姿は

本当は

小さいのではなく

遠くにあるからだ

そう

光が

小さかったのではなく

ただ

自分との

距離だったとは

知ってのことか

悪に囲まれた

日本

その中にも

滅びの種は

心を毒する

外から内から

日本を

破壊する者たち

そこまで

日本を嫌うとは

この国に

主が

降臨されている

ことを

知ってのことか

圧倒的な慈悲

清らか

だからこそ

いただける

精妙な仏の光り

空気が

光に

風が

黄金に

たなびく

圧倒的な

慈悲

こんなにも

心地よい光りが

降り注ぐ

胸の奥から

湧いてくる

繊細で

静かな光りは

心を

熱く熱く

満たしてくれる

こんなにも

精妙な

世界に

生きていたとは

この星に恥じぬように

朝の静寂

生命は

動き始め

精妙なる

ちからが

みなぎっている

心は

激しく感ずる

そう

この空に恥じぬよう

この海に恥じぬよう

この木々に恥じぬよう

この草花に恥じぬよう

この星に恥じぬよう

生きていく

それが

使命と

胸が熱くなる

大和心

死を

詩にして

弔えりは

大和の心なり

正しい道に

欲望に

目覚め

自分を

失う日々

自分が自分で

ないような

毎日

胸の痛みは

良心のしるし

その合図に

気付ければ

やがて

もとに戻れる

正しい道に

生命の限りを

鳥たちは

さえずり

虫たちは

合唱し

風は

葉をゆらし

海は

寄せて引く

みな

それぞれの

うたを

うたっている

生命の限りを

日本の意味

主が

この地に

降りられ

法を説いて

光りが配られ

縁生の弟子たちとの

救いの約束が

果たされて

いく様を見て

実感する

この日本が

主に

選ばれた

意味を

神々が

集う国

神国

日本の意味を

ここから

未来が

はじまって

いくことの

意味を

夢は志

夢は

大きく

いくつに

なっても

夢を抱く

いくつに

なっても

夢を実現する

その日まで

この時代に

生まれたことを

誇りに思いつつ

夢は理想となり

皆が仰ぐ

志しとなる

少しずつ

少しずつ

取り戻そう

清らかな

心

少しずつ

取り戻そう

美しい

心

少しずつ

取り戻そう

善なる心

この世に

染まり切らない

見えないものを

取り戻すために

本来の

心に

戻る

ために

目に見えない

真実は

あなたの

ために

最後の問い

あと戻り

している

でも

自分を

あきらめては

いけない

今

現れている

問題は

自分

固有の問題

なのだから

誰の

せいでもない

自分が

自分で

答えを出す

問いでも

あるのだから

信仰は

自分自身への

最後の問い

なのだから

悩みは

足りないものを

数えると

はじまっていく

成功は

自分の

ひとつひとつを

感謝して

拝む気持ちから

はじまっていく

反省は

武器である

光りが

ほとばしって

悪が

弾けていく

心が

満ち足りた

幸福は

悟りの静かな

訪れの余韻

自分の錯覚

人の心

自由自在

誰の力も

及ばない

一人ひとりの

王国

自由な心は

不自由に

なりたがる

強い刺激

激しい原色

を

追い求めて

止まない

心は

形を求め

型に

はまりたがる

本来の自由を

ひとつひとつ

自分で

鎖につなげ

不自由だと

声を

荒げている

その鎖は

自分の

錯覚だと

気付くまでには

省みる努力

気持ちの整理の

つかないまま

時に

流されて行く

乱雑な

心の中

ホコリだらけだ

心の中の

輝きを

曇らせる

汚れを

払うのは

自らを

省みる努力に

ほかならない

実現

夢の途中

諦めないまま

時は

すぎてゆく

強い思い

ありありと

心の中では

起きている

出来事

もうすぐ

その思いは

実現する

世のため

ひとのために

救世の時代

主の心

奏でるメロディー

それぞれの

使命の光り

合わせて

救世の時代

輝いて

後生に遺せ

その道筋を

永遠に

歩くものたちが

後続く

創造の原始

偉大な光り

降り注ぎ

大地を照らし

癒していく

心の中に

宿る

その光り

未だ

気づかずに

生きてる人間

心の中には

創造の原始が

隠されている

偉大なものと

同じ

人それぞれの

宝として

対峙

光り輝く

本来の姿

遠く

離れてしまった

自分

欲求が

高くなった

自分

この三次元の

波動に

汚れていく

自分

取り戻せ

正しい真理の

力によって

この世は

自分のおもいが

他者との

関わりなのだと

いうことを

他者との相克が

仏への道を

眩ませてしまうのだ

ということを

本当は

仏と自分が

対峙している

だけなのだから

整える

死を思えば

生に感謝できる

生を思えば

死を迎えることに

準備ができる

生と死の意味は

時折

自分の中に

込み上げて

くるけれど

そのなかに

今を確かに生き

全てを捨てても

いいような

気持ちに

自分を

整えておくことで

執着を去る

自分は

精神は

この世と

あの世に

またがって

つらぬいて

いるのだから

課せられた使命

胸の奥から

湧き上がる

伝えたい

気持ち

大きな意志

今

天命がくだる

この小さな胸が

押しつぶされそうな

天の使命

小さな自分に

大きな重荷が

約束として

果たしてゆく

この世にきた

意味として

この日本に

生まれた

使命として

この時代に

生まれた

意味として

日本人

全員に

課せられた

使命

だから

負けはない

あっという間に

流されて

違う場所に

立たされて

元に戻ろうと

思い出す

その螺旋が

上昇していれば

同じ位置でも

違っていると

永遠に

諦めなければ

負けは

ないのだから

心の声

静かな朝

幸福の瞬間

時間が

ゆっくりと流れ

その音が

響く

心の声は

研ぎ澄まされ

よく聞き取れる

このあとの

嵐が

如何に

こようとも

このひと時を

大切にする

信仰に満ちている

この場所で

頂の影

時に離れ

時に近づき

時に遠くに

時に

そこに

あらわれたかと

思うと

また

消えた

つかもうとすると

すり抜けてゆく

しかし

肩にとまる

その時に

訪れている

蝶が

肩に

憩うという

悟りは

掴もうと

力めば

消えてしまう

頂の影か

光りの助走

いろいろな

おもいのなか

ひとつの

光りだけに

心を合わせて

同化する

自分は

自分で

なりえない

ときは

同化しながら

助走を

助けられながら

光りを取り戻す

闇は深く

今は

まだまだ

だから

闇の深さを

知れば

足が

竦んでしまうから

悩みと自分

静かに

自分を

振り返る

自分が

見えてくるまで

自分を考える

自分

自分と

自分ばかりの

自分に

自分という

悩みが

追いかけてくる

自分を

忘れるほど

何かに

打ち込んだり

誰かのために

尽くしたり

我を忘れるほど

夢中になれた

時だけ

悩みが

消えている

不思議

悩みとは

自分だったとは

詩を書いている瞬間の美

わたしは

詩を書いている

瞬間だけ

美しい

その瞬間は

愛

その瞬間は

夢

その瞬間は

聖

その瞬間は

主と共に

ひとつの言葉

ひとつの身体

ひとつのおもい

美の世界のなか

清らかなおもいは

主の御心のなか

わたしは

詩を書いている

瞬間だけ

美しい

挑む心

挑む心

負けない気持ち

折れない精神

前へ進め

燃え上がれ炎

心の灯

消えない理想

自分との戦いは続く

ふと

他人を

羨ましいと

思うことがある

何だか

自分がみじめに

思える時がある

心が揺れる

立っている場所が

突然

沼のように

泥に沈みそう

足がつかり

胸がつかり

肩までつかり

首が

そして

息が苦しくなる

そのとき

祝福の気持ちで

羨ましいと思う人を

祝福する

あれ

羽が生えたように

飛んでいる

祝福が

理想像であり

希望の翼だったとは

死の階段

胸の痛みに

耐えかねて

すべてを

投げ出して

しまいそうになる

胸の痛みは

死の階段

今の自分を

虚しくさせる

明日という日は

贈り物

一日一日は

宝物

一日一日

生かされている

日々

愛は

確かに

存在している

理想像以外は

自分は

誰と

競争しているのだろうか

自分は

誰と

競い合っているのだろうか

自分は

いつも

誰を

見ているのだろうか

自分は

いつも

どこを

見ているのだろうか

自分の理想像さえ

確かなら

それ以外は幻

光りは

自分のなかに

あるものだから

厳しさは

その選択のなかに

生き残りを賭けた

成長を

促進させてくれる

生きて行く上で

より強く

より賢く

より優れているものが

残っていく必然に

人間が

逆行し

取り残されて

いくようだ

街で

見かける

猫たちに

何の保障も

ない

枝にとまって

歌っている

鳥たちは

誰に

餌を

もらっているのだろうか

微かな奥

深く自分に入り

音少なく

光り

微かな

奥のおく

今までの

自分を

通り過ぎて

反省すると

視界がだんだん

あざやかになってくる

心の泥が

堆積している

底を洗いながら

少しずつ整えていく

やがてくる

その日を

待ちながら

努力の向こう

努力の向こうに

何がある

努力の果てに

何がある

努力した者にしか

わからない

努力の果ての

宝物

挑み続ける

燃える海

沈む夕日

夜は闇

やがて

朝となる

すべてを

照らす

太陽は

挑み続けるが

ごとく

昇ってゆく

海図なき航海

信仰なき

自分探しは

海図なき航海

方向が

わからなくなり

遭難しやすい

信仰を持って

神仏との関係において

見つけた自分は

光りの方向に歩む

旅人

明るく

照らされている

道は

自分を

確かに

守ってくれる

未来へ

人生の

やり直しには

いつだって

新しいノート

何を書き込むかは

自分に任されている

人生の

再出発には

いつだって

新しいことば

発する心が

あなたを決める

人生の挑戦には

新しい一歩

その前進が

未来を

決めて行く

死後の世界

なぜ

という

おもい

強く

どうして

というおもい

切なく

死後の世界を

知らずに

この世を

去った魂は

還るところが

わからずにいる

隙間が消えるとき

心の隙間

埋めようと

いつも

何かを

探している

心の隙間は

埋まらない

足りないものを

数えても

愛ある言葉

感謝の心

おもいが

ふくらみ

隙間は消える

解決に

いつの日か

恐れていた

現実

逃げていた

今に

追いつかれてしまった

向き合う勇気は

小さくて

今は

怖気づいている

備えは

万全ではない

しかし

憶測をやめ

前に一歩出よう

解決に

一歩近づくから

信じれば見えてくる

悪意が

おそう

日々の生活

乱されて

かき回されて

心を保てない

主を信じれば

主を信じればこそ

見えてくる

光りのみ実在と

君がやめない理由

君は

頑張っているね

いつも

応援しているよ

努力をやめない

姿に

いつも

エールを送っているから

君は

気が付かない

かもしれない

けれども

いつも

そばに

いるよ

後ろから

見てるからね

君が

やめない

理由を

知っているから

負荷

日常の重しは

心の負担

前に進めば

負荷がかかる

それぞれの

思惑

それぞれの意図

絡まっている

おもいは

重くのしかかる

足取りは厳しく

波に

揉まれそうに

なりながら

必死に

未来を

見据えて

今日を行く

すべては

魂の糧だから

変われたらいいね

愛の表現を

上手くできずに

心が行き違う

悲劇は

いつだって

起こりうる

順序や手続きが

まどろっこしくて

焦って

ものごとを

進めすぎて

壊してしまう

人と人とは

一足飛びに

超えられない

ものがある

人の心は

急速に変わる

速度に

追いつけないときが

あるのかもしれないね

ゆっくりと

少しずつ

変われたら

いいよね

詩すれば

君にとって

手段だったものが

僕には

目的だった

君にとって

芸術は

一つの手段

だったけれども

僕にとっては

人生だった

詩は

僕にとっての

目的なんだ

詩すれば

花

詩すれば

人生

詩すれば

生と死

詩とは

わたし

地球の行方

地球という

星は

どこへ

行こうと

しているのか

宗教は

ぶつかり

経済は

危機を向かえ

政治は

混迷を

極めている

地球に

地球人が

いなくなる

悲劇は

まだ

誰にも

気づかれずにいる

最初に

地球に

来た頃の

思いを

忘れ

次に

来よう

としている者の

餌食に

なろうと

している・・・

のに

最終局面

最終局面に

向かっている

人類は

人間だけで

乗り切ろうという

心に

無理がある

神は

見捨てずに

今

ここにいる

人類が

委ねれば

救われるだけ

なのに

なぜ

伸ばしている

手を

はらうのか . . .

今も昔も

悲しみを

乗り越え

苦しみを

乗り越え

今を

受け入れて

前を見る

天は高く

地は広く

海は深く

愛は

無限の光りを

注いでいる

今も昔も

変わらぬ

空

変わらぬ

光り

一緒だね

君が

見ている

不思議と

感じる

見えないのに

確かに

君がいることが

わかる

だから

信じる

君が

いつも

一緒に

いることを

おのおのの人生

それぞれの道

進みはじめ

それを

止める考えは

やがて

その者たちの

意思の強さに

遮られてゆく

旅立った者たちは

自分の世界をつくり

その世界で生きていく

おのおの

人生を

歩いている

その者たちの

意思によって

考えに

よって

哀しい眼

その嘘は

哀しい眼のなかに

暗く

墨汁のように

滲んでいた

どうしても

つかなければ

ならない

その嘘は

自分を

傷つけても

いたね

もういいよ

今は

過去では

ないから

哀しい雨

哀しい

雨

哀しい

嘘

心は

涙で

溢れている

認めたくない

自分の間違い

けれども

ごめんなさい

という

勇気が足りない

その嘘は

わたしの

こころを

よごしてゆく

哀しい雨は

そのうそを

洗い流しては

くれそうにない

人生は心の姿

人間は

考えることが

自分

そのものという

人生は

心の姿だと

いう人もいる

内側と外側の

世界が別に

存在していると

思えるけれども

自分の意識が

分け隔てているだけ

自分とは

心のおもいと

人はいう

思想の力

柔軟な考え

柔軟な言葉

魅力ある人物

人を引き寄せる力

言葉の力は

限りない

思想の力は

時代を変える

地球の

未来が

揺れている

あるべき

すがたが

みえてくる

死後を司る方

死後を

司る方が

今

降臨され

生の意味を

説かれている

人は

やがて

死ぬのが

運命ならば

その行いの後は

恐るべしと

思わない

愚かさに

戦慄を

覚える

本来の世界こそ

あの世

だから

いかに

つらく

きびしくとも

ペンを

にぎり続け

詩を

書き続け

この胸の

虚無を

追ひ払い

明日に

夢を託す

息をするだけで

つらいとき

この苦痛こそ

生きている

証と

自分に

いきかせ

気づき

日本人への

気づきは

いたるところで

響き渡る

空はあれ

海は白波

森は動く

日本国への

神国への

無関心は

許さないとの

声を聞けと

言わんばかりに

変わらぬ姿

季は移り

神の姿が

あらわれる

おもいは

こころ

人生は

こころの

姿

移りゆく

花も葉も

木も土も

人も

国も

変わらぬ姿は

神の御霊の

輝きか

神威

神々が集い

神域を高め

その力を

行き渡らせ

国を護るとき

ことばは

響き渡り

言霊が

現実を

引き寄せる

神国への

神威が

高まっている

残された時間

危機は

迫り

猶予はない

日本人全員が

頭を巡らせ

神国防衛を

訴える時

脅威は

計画を

実行するだけの今

残された時間に

すべてを賭ける

悟っていない自分

悟っていない

自分を

発見することは

つらいことだ

目を

そらしたくなる

現実

違った現実を

加えたいくなる

悟っていない

自分を

見つけることは

耳を

ふさぎたくなる

心の声

歩みの遅さよ

だからこそ

永遠の努力と

進化は

継続されて行く

果てしない旅

無限の向上は

無上の喜びだから

過ぎた欲

貪る気持ち

去来するおもい

あれも欲しい

これも欲しいと

休むことなく

流れる心の渦

お金が

あったらいいなと

お金のことばかり

考えていたり

食べ物のことばかり

思い浮かべたり

ずーっと

休みだったらいいなと

想像したり

ないものをねだる

貪りは

過ぎた欲の

あらわれか

光りに影を

日々のおもい

たりなき

自分

理想は

遠く

見果てぬ夢は

霞む

日常の

空気にも似た

日々

主の力が

行き

渡っているのに

自分という

形が

光りに

影を

落としている

高める方法

今日

何が

起こるか

わからない

日々

明日が

どうなるかなんて

検討もつかない

毎日

自分を

見失いそうな

今に

日々

怠りなく

自分を

高める方法は

少しでも

学び続ける

意志に

よる

継続は

やがて

精神力を

高めて

くれると

信じて

花の色

散りゆく

サクラの

なごりには

ソラが

花の色に

染め上がる

君と歩きし

あの小径

肩に

とまりし

花びらの

色の

おもいは

心の中

花の色は

思い出に

君への

想いは

この季節

あの場所へ

戻りゆく

死後も生き続ければ

夢が

叶った

人がいる

夢に

破れた

人がいる

夢を

持たなかった

人がいる

それぞれの人生

形をあらわして

その人の姿

歩んだ道が

その人の心

死後も

生き続ければ

夢の道は

永遠の継続

見極め

この世界で

何が

いいのか

見極めるのは

なんて

難しい

こんなに

大勢の人がいて

自分がという

思いが

交差して

奪い合っている

ものは

なに

掴み切れない

幻は

追いついたら

消えている

つかまえたら

なくなっている

見えない

真実は

見えない心が

受け取る

歓喜か

声を枯らせて

誰にも

聞いて

もらえぬ声を

発した事が

あるか

独り

孤独の中

声を枯らせて

地べたを

叩いた事が

あるか

すべてを

剥ぎ取られ

自分が

何かを

表現するとき

何を

語るかは

自分の言葉を

持っているかに

かかっている

その

哀しみの意味を

胸の扉から

解き放て

生きた言葉は

生きた人生から

生まれるのだから

修行

今世は

自分を

つくっていく

修行

いかに

自分を

自分によって

真理を

この地上に

試練を超えて

打ち立てられるかの

修行

自分を

見失わず

自分を

見つける

真理を

柱として

自分を

構築するとき

信仰は

日々の修行の

小さな

積み重ねと

積み上がった

年月の

自分だったと

振り返る

正義の剣

哀しみと

恐怖が

世界に

こだまする

悪は

善の

隙間を

ついて

心を

破壊しようと

たくらんでいる

正義の剣は

抜かれた瞬間

行き渡るのに

一途

一途な

おもい

胸の奥

聞いては

もらえぬ

うた

うたう

一途な

おもい

心の中

響かぬ

言葉

紡いでいく